The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

偈頌から見た支謙訳『維摩詰経』の特徴について

岩松浅夫

I

『維摩経』(*Vimalakīrtinirdeśa-sūtra*) のテキストには，周知のように計5種の異本が存する．すなわち，漢訳の支謙訳『仏説維摩詰経』と鳩摩羅什訳『維摩詰所説経』及び玄奘訳『説無垢称経』(以下，これらはいずれも訳者名で表すことにする) の3本と，ティベット訳 (*'Phags pa dri ma med par grags pas bstan pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo*: Peking No. 843, Derge No. 176) と梵本を併せたものがそれであるが，その中，最後の梵本は比較的最近になってその写本が発見され，テキストも出版されたというものである．この『維摩経』の梵文は，これ迄 *Śikṣāsamuccaya* など他の書物への引用によって一部が断片的に知られるのみで，テキストそのものとしては長い間その存在すら知られなかったものであるが，いずれにしても，この梵本の出現によって『維摩経』に対する研究も新しい時代を迎えたと言ってよいであろう．実は筆者も，その驥尾に付す形で，同経の特に偈頌の部分に関して少しく研究らしきものを試みてみたことがある．本稿では，その一環として，やはり同経の偈頌の中から，特に上記諸本の中でも最古と目される支謙訳[1] について気付いたことを述べてみることにしたい．

II

さて，『維摩経』では，偈頌は梵本の第1章と第7章 (漢訳は，いずれも序品と第8品) に，前者は15偈，また後者には42偈がそれぞれ纏って掲げられている．その中，梵本と支謙訳が (大略) 一致するのは，前者が8偈，そして後者は40偈の計48偈ということになろう[2]．一方，梵本とティベット訳は，細部においてはもちろん相違点もなくはないが，その有り様(よう)や内容は殆ど一致すると言っても過言ではない (と思われる) ので，ここでは梵本によって代表させることにすれば，計4種の異本の中で一偈がまるまる一致するものは少なく，何らかの形で

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

異なっているのが大部分ということになろう．その相違の仕方や程度も偈によってさまざまであるが，テキスト相互の関係ということで言えば，概ね例えば(1)4本とも異なるもの，(2)梵本のみ異なるもの，(3)支謙訳のみ異なるもの，(4)鳩摩羅什訳のみ異なるもの，そして(5)鳩摩羅什訳と玄奘訳のみ（両者だけでは一致するが）異なるもの，などのように分けて見ることもできるかもしれない[3]．ところで，そのような各本間の相違の中で，テキスト間の新古の関係ということで言えば，例えば(3)は支謙訳が最も古く，反対に(2)は梵本が最も新しいことを物語るものとも見得ようから（尤も，果してその通りであるかどうかは改めて検討しなければなるまいが），それ程異とすることではないが，その意味でも注意されるのは特に(5)のような場合ということになろう．と言うのも，そこではテキスト相互の異同がそのままそれらの新古の順序を表したり反映するものではないからなのであるが，実は，支謙訳（の偈頌）の中には同じような例が他にも幾つか――少なからず!? ――見られるのである．その一二の例を挙げれば，例えば次の如きものがある[4]．

① satkārasatkṛtu na vedhasi merukalpa
duḥśīlaśīlavati tulya gato 'dhimaitrī |
gaganaprakāśa manase samatāvihārī
ko nāma satvaratane 'smi na kuryu pūjāṃ ‖ [1] 8 ‖
（支）供養事者如須弥　無誡*与誡等以慈　所演如空念普行　孰聞仏名不敬承　*誡＝戒㊂
（什）毀誉不動如須弥　於善不善等以慈　心行平等如虚空　孰聞人宝不敬承
（玄）八法不動如山王　於善不善俱慈愍　心行如空平等住　孰不承敬此能仁（第1句を除く）

② udyānaṃ dhāraṇī teṣāṃ bodhyaṅga*kusumaiś* citaṃ |
phalaṃ vimuktijñānaṃ ca *vṛkṣā* dharmadhanaṃ mahat ‖ [7] 5 ‖
（支）総持為苑囿　覚華甚奇快　厥実度知見　彼樹法林大
（什）総持之園苑　無漏法林樹　覚意浄妙華　解脱智慧果
（玄）総持作園苑　大法成林樹　覚品華荘厳　解脱智慧果

③ buddhakoṭyo hi pūjitvā sarvapūjāhi nāyakān |
na caivātmani buddhe vā jātu kurvanti niśrayaṃ ‖ [7] 14 ‖
（支）供養億如来　奉諸三界将　不我則為仏　生輒務成養
（什）供養於十方　無量億如来　諸仏及己身　無有分別想
（玄）尽持上妙供　奉献諸如来　於仏及自身　一切無分別

④ buddhakṣetrāṇi śodhenti satvānāṃ caritaṃ yathā |
ākāśakṣetra'nuprāptā na satve satvasaṃjñinaḥ ‖ [7] 15 ‖
（支）修治仏土浄　訓化諸群生　由是得最刹*　無人人所行　　*刹＝利㊂

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

（什）雖知諸仏国　及与衆生空　而常修浄土　教化於群生
（玄）雖知諸仏国　及与有情空　而常修浄土　利物無休倦

すなわち，先ず①の例では，ここでは特に第２詩句に着目して言えば，支謙訳の「無誡(＝戒㊀)与誡」はそのまま梵本の‘duḥśīlaśīlavati’に対応すると見てよいであろうが，鳩摩羅什訳と玄奘訳は共に「善不善」と，別語のように訳されており，次の②では，喩えられている「華」などの順序が第２詩句以降で，梵本と支謙訳，また鳩摩羅什訳と玄奘訳で（前の２者，後の２者同士はそれぞれ同じだが）大きく異なり，また③では，これも①と同様特に最後の第４詩句に注目すると，梵本と支謙訳，そして鳩摩羅什訳と玄奘訳とではかなり大きく異なっていることが知られ[5]，そして最後の④に関しては，偈全体が梵本と支謙訳，鳩摩羅什訳と玄奘訳で（前２者同士，後２者同士は大略同じだが）殆ど別文のようになっている，等々というわけである．

Ⅲ

細かい点に迄亘って見れば，同様の例は枚挙に遑ないということになろうが，さてそこで，もしこのような例が存在するということになると，ここで問題になってくるのはそのような両者の関係，具体的には両者の中のどちらがより古く（本来的で），反対にどちらの方が新しい――後代に改変された？――ものかということであろう．これはしかし，一般的にはかなり難しい問題のように思われる．実際，例えば上の①の例の場合に関して言えば，「破戒と持戒」(duḥśīlaśīlavat-)と「善と不善」のどちらが本来のものであったか云々について論じるには，それなりに（相当の!?）考察や検討等が必要ということになるであろう．それに更に改変や変更の理由付けなども加わるとなると，困難は一層増すということになろう．それはともかく，上に挙げたものの中には，必ずしもそうではない，つまりそれ程困難なく両者の先後関係が言い得るものも存するように思われる．それは，具体的には②の場合で，すなわち，そこに掲げられた「華」などの喩語の順序がその判断や判定の重要な手掛りになるのではないかということである．ということで，ここで改めてそれらの順序について見てみると，支謙訳と梵本は苑囿(udyāna-)→華（kusuma-）→実（phala-）→樹（vṛkṣa-）と次第するのに対して，鳩摩羅什訳と玄奘訳は園苑（udyāna-）→樹→華→果（phala-）の順になっていることが知られる．ということで，これらを比べて見れば，順序としてどちらがより自然であるかは改めて言う迄もないであろう．すなわち，後者が自然で素直と思

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

われるのに対し，前者には一貫性がなくむしろ乱れた形になっていると言ってもよいであろう[6]．とすれば，少なくともこの②の場合には，後者（鳩摩羅什訳と玄奘訳）の方が古く（本来的？），前者（支謙訳と梵本）は新しい（改変された？）と見て大過ないのではないか，ということである．

では，もしそうとすれば，その後者の原（もと）の文はどのようになっていたのであろうか．それについて考えてみるのも，必ずしも荒唐無稽な許りではないであろう．ということで，ここでその筆者の想定したものを掲げてみれば，次のようにでもなるであろうか[7]．

udyānaṃ dhāraṇī teṣāṃ vṛkṣā vane mahādha^{r}māḥ |
kusumāni śubha bodhyaṅgāḥ phalaṃ vimukti^{j}ñāna ca ‖ [7] 5 ‖

この筆者の推定復原文は，筆者としてはそれなりに種々工夫を凝らし勘案して想定したつもりのもので，特に韻律，この場合には śloka の特に pathyā（長短調は，⏑⏑⏑⏑‿ – – ⏑，⏑⏑⏑⏑‿ – ‿ ⏑）ということになるが，それにはできるだけ牴触しないように配慮したために，通常の Skt. からすると異形とされるような部分や箇所も少なくない．例えば，第２詩句の第７音と第４詩句の第５音は，そのままでは後に子音が２つ続くために作詞法上は長音（long by position）ということになるが，韻律的には短音でなければならないためにそれらは共に単子音として扱われていると見たり[8]，また第３詩句の冒頭の２つの短音は長音が分裂（resolve, split）し[9]，同じく第３詩句の bodhyaṅga- は Skt. では中性だがそれが仏教梵語（Buddhist hybrid Sanskrit）的に男性形で現れているとし，更に第４詩句の第７音節はやはり韻律上短音でなければならないために本来の naṃ が na となっている，等々．尤も，このようなこと自体は仏教梵語の偈頌では大部分がそれ程特異でも珍しいことでもなく，或る意味では極く普通にと言ってよい程見られるものであるが，ただ，ここで筆者としても多少気になると言うか問題になるかもしれないと思われるのは最初に掲げた第２詩句の第７音の後の２子音即ち -dharmāḥ の rm に関してで，つまり語頭はともかく語中の場合にそのように２子音を単子音として扱うことが実際にどれ程あり得たのかということであろう．と言うのも，実は筆者はこれ迄そのような例に接したことが殆どないからなのであるが，いずれにしても，もしそれがあり得たとしても，特に韻律に敏感な人物からすれば，かなり不安定に思われたのではないであろうか．

上の如き筆者の想定文がどれ程正鵠を射得たものか，それに関してはもちろん

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

筆者にも然して成算や確信等があるわけではないが，にも拘らず，そのように原文を復原・想定し，剰えそれ（自分の復原文）について長々と云々したのは，実は筆者は，上のようなこともあり得たかもしれないということを含めて，韻律上の問題こそがこの②の例の改変・変更の最大の理由だったのではないかと考えるからなのであるが，果して如何なものであろうか．

いずれにしても，もしこのように，例え一部とは言え鳩摩羅什訳や玄奘訳の方が古く，支謙訳と梵本が後の改められた様相を示しているとすれば，このことは，支謙訳（の原本）のオリジナル性を疑わせるに十分であると言ってよいであろう．すなわち，総体的には現存最古と目されるこの支謙訳も，テキストとしては最古でオリジナルなものでは決してあるまい，ということである．

Ⅳ

次に，この支謙訳と梵本を較べて見ると，両者が一致しないような部分や箇所が多々見られるが，そのような中，一部には両者の中間にある言語を想定することによって説明や理解が可能になると思われるものが存するので，その点について触れておきたい．例えば，次のような例について見てみることにしよう（参考のため，ここでは対応する鳩摩羅什訳と玄奘訳も一緒に掲げておくことにする）．

śubha*karmasaṃcaya viśāla*guṇāprameya: 浄除欲疑称無量（〔什〕＝久積浄業称無量，〔玄〕＝久積無辺清浄業　獲得広大勝名聞）（[1] 1c）

すなわち，この例では guṇa- の語を除けば鳩摩羅什訳と玄奘訳は梵本とかなりよく一致するのに対し，支謙訳はそうではなく，同語以外にも例えばイタリックの部分が「除欲疑」と，殆ど別語句のように訳されているというわけである．ところで，ここで少しくその支謙訳の「除欲疑」なる訳語の原語について考えてみると，この漢字３字の表す意味と対応すると見得べき上記梵本の各語の語形から，各漢字に対してはそれぞれ（Skt. で）次の如き語が想定されるのではないであろうか．

欲：kāma-（← karma-）？

疑：saṃśaya-（← saṃcaya-）？

除：vicāla-[10]（← viśāla-）？

ところで，ここではそれらの基になった（と考えられる）梵本の各語も（逆矢印＝←と共に）括弧に入れて示しておいたが，実はこのような一方から他方への

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

変化が，ある特定の言語（プラークリット）では実際に起り得た（ろう）ことが知られるのである．それは，具体的には所謂るガンダーラ語（Gāndhārī）のことで，すなわち，そのガンダーラ語を媒介させれば，支謙訳と梵本の懸隔は埋め得る（であろう）ということである．実際，例えば karma- と kāma- の関係について言えば，ガンダーラ語の標記に用いられるのはカローシュティー（Kharoṣṭhī）文字であるが，そのカローシュティー文字の書法では通常は母音の長短は区別せずまた複子音も単綴される（ことが多い）ために，両語とも全く同語形の kama の如く綴られることになり[11]，一方また該ガンダーラ語では，その少なくとも一部では（Skt. の）c は ś，反対に ś は c となることが知られ，就中第2の saṃśaya- と saṃcaya- に関しては実際に前者が後者の如くなる例も知られている[12]ことから，上の3つのような変化も実際にあり得たであろう，というわけである[13]．

このような，つまり支謙訳の原語にガンダーラ語を想定することによって説明が可能になると思われるような例は，筆者の気付いただけでもまだ他にも幾つか存する．参考のため，ここでは紙数の都合で詳しい説明等は一切省略し，該当すると思われる例だけを一二掲げておくことにしよう（対応する部分をイタリックと下線で示す．また，3番目以降は偈頌ではなく長行で，冒頭に会座の菩薩名として見られるもの）．

*samatā*vihārī: 普行（〔什〕=〔心行〕平等，〔玄〕=平等住）（[1] 8c）
*samādhi*jalapūritāḥ: 正水満其淵（〔什〕〔玄〕=定水湛然満）（[7] 6b）
*sama*darśin(*ā*)：正観（菩薩）（〔什〕〔玄〕=等観〔菩薩〕）
brahma*jāla-*（°*lena*）：梵水（菩薩）（〔什〕〔玄〕=梵網〔菩薩〕）
*jālinī*prabha-（°bhena）：水光[14]（菩薩）（〔什〕=明網〔菩薩〕，〔玄〕=光網〔菩薩〕）
dharma*ketu*(*nā*)：法造（菩薩）（〔什〕=法相〔菩薩〕，〔玄〕=法幢〔菩薩〕）
prabhā*ketu*(*nā*)：光造（菩薩）（〔什〕=光相〔菩薩〕，〔玄〕=光幢〔菩薩〕）

V

こうして筆者は，該支謙訳の原本は恐らくガンダーラ語で表され，少なくともその可能性はありまた高かったのではないかと推測し，またそう見得べきことを提起したいとも考えるのであるが，ではもしそうとすると，その支謙訳の原本は，先にも見たように一方では鳩摩羅什訳や玄奘訳よりも新しい面も示していることから，大本（もと）のテキストからすれば，恐らくはそれ即ち鳩摩羅什訳や玄奘訳の本（もと）本？から梵本及び支謙訳の本（もと）本へ，そして更に支謙訳の直接の原本のガンダーラ語本

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

へという[15]，少なくとも2度の改変を経たものということになろう．しかしてまた，そのような改変や変更は恐らく短時日の間に立続けに行われたというわけでもあるまいから，もしそうとすれば，一般に経典の翻訳がその経典成立の最下限の絶対年代を与えるものとしても，この『維摩経』の場合には，その大本（もと）の原典の成立はそれよりも恐らく数十年乃至場合によっては百年以上は遡る（すなわち，もしこの訳本が本当に支謙の訳とすれば，訳出は3世紀半ば以前ということになるので，2世紀半頃迄には成立していた？）ということになるのではなかろうか．そして，実はこのことこそが，本稿一篇の結論と言ってもよいかもしれない．

1）この支謙訳に関しては，それの訳者に必ずしも問題がないわけではないが，ここではその問題については立入らないことにする．因みに，もしこれが実際に支謙の訳とすればその訳出は222-253年の間，また鳩摩羅什訳は406年，玄奘訳は650年で，更にティベット訳は9世紀前半以前，そして梵本の書写は（恐らく）13世紀以後と想定されるので，これらの新古の関係も大略この（訳出または書写の）順序通りと考えて大過ないであろう．

2）各異本間における偈頌の対応関係については，拙稿「『維摩経』梵本の偈頌について」『印度学仏教学研究』第55巻第2号，平成19年，を参照．

3）相違のあり方ということだけで言えば，この他にも例えば4本とも同じものや玄奘訳のみ異なるものなど，計16種が可能であるが，中には実際には存しないものも多く，重要なものは概ね以上で尽されると言ってもよいであろう．

4）ここでは，細かい点はある程度無視して，明白な，或いは顕著な相違を示すものを掲げることにした．また，サンスクリットのテキストに関しては，写本からのローマ字転写本やそれを校訂したものも存するが（この点については，前注2）に所掲の拙稿を参照），本稿ではその「校訂本」に更に筆者の修正等を加えたもの（拙稿「梵文維摩経偈頌攷正（I）」「同（II）」『創価大学人文論集』第19,20号，平成19,20年，参照）を用いることにした．なお，偈頌の番号の前に付したカギ括弧付きの数字は（混同を避けるために付けた）章の番号を表す．

5）ただし，支謙訳と梵本の関係については，「生」とjātu以外に両者が対応するかどうか不明なので，ここではこの例は除外した方がよいかもしれない．

6）実は，梵本では，第2詩句は第1詩句と独立ではなく，構文上後者（の特にudyāna-）に掛るようになっている．したがって，細かいことを言えばその点迄踏えた上で議論もしなければならないわけであるが，ここでは単純に掲出されている喩語の順序だけを問題にすることにする（因みに，梵本でそのようになっているのは恐らく2次的な改変に因るものであろう）．

7）ここでは，特に第2詩句の部分は，（鳩摩羅什訳ではやや――かなり！――困難なために）玄奘訳を基に復原を試みた．したがって，鳩摩羅什訳の「無漏」は直訳ではなくmahāの意訳と見ることになる．また，これに相当する支謙訳の第4詩句の原文も，

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

同訳の語（字）順から考えると，vane と dharmā(ḥ) が入替って，(Skt. で) vṛkṣā dharmā vane mahā のようになっていたと見ることもできるかもしれない．

8）そのことを表すため，ここでは（2つの場合とも）一方の字を肩付きの小字にして示すことにした．

9）この特に（長音の短音2つへの）音の分裂云々の問題は，例えばこの kusumāni を同義別語の puṣpāṇi などに置換えてやれば解消するが，そのことは，反対に，もし前述したように現梵本のこの偈の部分は後世の改変を受けているとすれば，前者＝kusumāni の語（形）は（恐らく韻律上の理由――そのままでは1音節分音量が不足する――で？）後者がかく改められた，ということを物語っているのかもしれない．

10）この語は，『梵和』には見られないので，特に仏教の経典等ではそれ程一般的な語ではなかったのかもしれない．しかし，例えば *PW* や *MW* には掲出され，その語義も前者では 'das Auseinanderrücken, Zertheilen,' また後者でも 'putting apart, distributing, separating …' の如くされている（特に後者では，語そのものや品詞としても異なるが包含する意味内容的には大同の〔と思われる〕vicālana- に対して 'removing, destroying' の意味も与えられている）ので，該「除」の原語としてこのような語（形）を想定するのも強ち不当と許りは言えないであろう．

11）この点については，see, e.g., J. Brough, *The Gāndhārī Dharmapada*, London Oriental Series vol. 7, London 1962, Index, s.v. 'kama (karma)' & 'kama (kāma).' ただし，「ニヤ文書」では前語の karma- は 'kamā' と，やや異なって綴られ（カローシュティー文字でも基字の ma の上に横線を付す形で表され）ている．

12）この c → ś, ś → c 及び特に saṃśaya- → saṃcaya の変化については，see T. Burrow, *The Language of the Kharoṣṭhī Documents from Chinese Turkestan*, Cambridge 1937, §§ 17, 48.

13）このようなことから，前引の梵本の文は，支謙訳では（Skt. で）'śubha *kāmasaṃśayavicāla yaśo*'prameya' のように解された（か，実際にそうなっていた？）のかもしれない．

14）この「水光：jālinīprabha-」の対応は，複合語の語順が逆の形になるので（鳩摩羅什訳と玄奘訳についても同じ），問題も全くなしとはしないかもしれない．しかし，ここでは語順よりも成分（構成要素）同士の対応が肝要ということになろう．因みに，この複合語の前分の jālinī- の語（形）は『梵和』を初め多くの辞典類に記載がある（見出語として掲出されている）が，*ja*linī- に関してはそれがない（少なくとも見出語としては掲出されていない）ということも付記しておこう．

15）この場合に，大本（もと）の原本はガンダーラ語で表されていてそれが Skt. ――若しくは，仏教梵語？――に改められたということは，種々の理由から（多分に！）考え難いことであろう．

〈キーワード〉 支謙訳，『維摩詰経』，偈頌，ガンダーラ語，テキストの改変

（創価大学教授）

NII-Electronic Library Service